

ダイオキシンの耐容一日摂取量 (TDI) について

(厚生省・環境庁同時発表)

三 好 康 之

ダイオキシンの耐容一日摂取量 (TDI) について、環境庁の中央環境審議会並びに厚生省の生活環境審議会及び食品衛生調査会において、合同で検討が行われてきましたが、平成11年6月21日(月)に報告書がとりまとめられました。

妊娠されていたり、乳幼児をお育ての会員のみならず、すべてのみなさまの関心が高い事項なので結論を中心にお知らせいたします。詳細は厚生省のホームページに掲載してありますので、ご覧ください。

1. はじめに

ダイオキシンの耐容一日摂取量 (TDI: Tolerable Daily Intake) は、ダイオキシンによるヒトの健康影響を未然に防止する観点からの確な対策を講じる上で重要な指標となるものであり、世界保健機関 (WHO) や各国において科学的知見に基づき設定されている。

我が国においても、これまで環境庁及び厚生省において、ダイオキシンのTDIあるいは健康リスク評価指針値を設定し、現在の汚染状況がヒトの健康に及ぼす影響の評価の指標、ダイオキシン対策の指標等として活用してきた。

このような状況の中、1998年5月、WHOの欧州地域事務局及び国際化学物質安全性計画 (IPCS) により、専門家会合 (以下「WHO 専門家会合」) が開催され、ダイオキシンのTDIの見直しが行われた。

我が国でも、環境庁及び厚生省が専門家会合を組織し、その合同会合 (中央環境審議会環境保健部会ダイオキシンリスク評価小委員会及び生活環境審議会・食品衛生調査会ダイオキシン類健康影響評価特別部会) において、TDIの見直しを行うこととした。さらに、本年3月30日、ダイオキシン対策関係閣僚会議において「ダイオキシン対策推進基本指針」が策定され、その中でこのTDIの

見直しを3ヶ月以内に行うこととされた。

2. 報告書の結論

○当面のTDIを4pg/kg/日とする。

- ・TDIの算定の基本的考え方は、WHO専門家会合と同じものを採用した。
- ・各種動物試験の結果を総合判断し、86ng/kgをTDIの根拠とする体内負荷量とし、この値からヒトの一日摂取量を求め、不確実係数10を適用して算出した。
- ・WHOでは、当面、現在の先進諸国での暴露量が耐容しうると考えられることから、4pg/kg/日を最大の耐容摂取量とし、究極的には1pg/kg/日未満に低減することを目標としており、我が国でも現在の暴露量は耐容しうると考えられる。
- ・なお、いくつかの動物実験では、体内負荷量86ng/kg以下の水準でも微細な影響が認められており、今後とも調査研究が必要である。

3. 終わりに

(1)TDIの意義と留意点

- ①耐容一日摂取量 (TDI: Tolerable Daily Intake) は、人が一生にわたり摂取しても健康に対する有害な影響が現れないと判断される体重1kg当たりの1日当たりの摂取量であり、一時的に多少超過しても健康を損なうものではない。
- ②今回のTDIは、最も感受性が高い胎児期の暴露の影響を指標としたため、人の集団全体に対する評価としては、より安全サイドに立っている。
ちなみに、発がん性等は、より高用量の暴露で起きるもの。
- ③今回の数値は、感受性の差など個人差等も織り込んだ不確実係数を適用した数字である。
- ④ダイオキシンの暴露は大部分が食事によるものだが、それぞれの食品の持つ栄養素の重要性等も考慮し、バランスの取れた食生活が重要。

母乳から乳児が取り込むダイオキシンの影響については、なお研究が必要だが、母乳哺育の有益な影響から母乳栄養は推進されるべきとされる。

- ⑤母乳中のダイオキシン濃度が過去20年程度の間
に半分以下に低下していることからわかるように、我が国のダイオキシン暴露量は低減してきたと考えられる。

さらに、政府では、今後4年以内にダイオキシンの総排出量を9割削減することとしており、環境中のダイオキシン濃度は今後一層の低下が期待される。

(2)今後の対策

①ダイオキシン対策の推進

- ・我が国の現在の暴露状況は、今回のTDIと比べて十分に低いと言えないことから、環境への排

出を削減することが必要である。

- ・ダイオキシンは生物にとって有害で無益なものであるから、将来的には、摂取量をできる限り少なくしていくことが望ましい。
- ・あらゆる関係者が、排出削減に向けた取り組みを推進することが重要である。

②今後の調査研究の必要性

- ・今回のTDIは、既存の化学的知見を基に算出された当面のものである。
- ・ダイオキシンの人体影響については、未解明な部分が多く、各種の調査研究の推進が重要である。
- ・今後の調査研究の進展や、WHOの再検討の状況を踏まえながら、改めて検討していくことが適当である。